



ザ・ターニング ポイント

会社発展の契機となった転換点を紐解く

長きにわたる企業の歴史の中にはいくつもの転換点があります。

異分野への事業展開、新しい取引先の獲得、技術開発によるブレイクスルー、あるいは苦境から脱した契機など、現在の発展につながった各社の「ターニングポイント」を紹介します。(この連載では創業から半世紀以上の会員企業にフォーカスします)

第23回 ショーワグローブ 株式会社

創業者 田中明雄氏の生い立ち

ショーワグローブ株式会社は兵庫県姫路市に本拠を置く家庭用手袋や様々な現場で使用される作業用・産業用手袋の専業メーカーです。

創業者の田中明雄氏は1920年に兵庫県神崎郡砥堀村(現在は姫路市に編入)で代々農業を営む家の長男として生まれました。

学生時代は中学、高校ともに柔道部に入部すると、主将として部員を叱咤激励し、毎日練習に励む生活を送ることで頑強な体を作り、不撓不屈の精神を養っていきました。

1941年、高校卒業と同時に満州(現在の中国東北部)へ飛び立ち、満州炭鉱(株)に入社しましたが、当時は20歳になると誰もが徴兵検査を受け、その結果によって兵役につかなければならなかったため、明雄氏も8か月ほどで軍隊に召集され、姫路で陸軍二等兵とし入隊しました。

その後、指揮官を目指し予備士官学校に入校すると見習士官として原隊に復帰し、兵士として再び満州へと戻ることとなり、厳しい戦闘訓練に明け暮れました。

特に冬期の耐寒訓練は過酷なもので、零下20℃から40℃に及ぶ寒さの中で顔は外気にさらされ、吐く息は即座に凍り、睫毛も眉毛もバリバリに凍り、瞼が開かなくなっていました。そして鼻の感覚はマヒし、鼻先が白くなるような状況でした。あまりの寒さに武器を持つ手も凍え、指先が凍傷になる兵士もいました。この満州での悲惨な体験が、後に手を保護するグローブの開発へと繋がっていくのでした。

1945年、長きにわたった戦争が終結し日本に戻ってきた明雄氏は、姫路市内の会社に一時勤めましたが、サラリーマンを続ける気持ちは全くなく、しばらくして会社を退くと、かつての戦友らのほか、数人を集め一緒に事業を始めました。

しかしながら共同経営の事業はなかなか思わしくなく、事業の回転資金を捻出するために石油製品のブローカーとして懸命に働くも、利益を生むところまではいかず失敗に終わりました。

それでも時代が変わりつつある中で、新しい文化、新しい産業の胎動が興ってくるのを肌で感じていた明雄氏は、なにかモノを作り、世の中に供給する事業を再び模索し始め、ついに塩化ビニールと出会うのでした。



創業者 田中明雄氏

塩化ビニールとの出会い

明雄氏は石油化学製品を扱いながら、石油化学が持っているさまざまな可能性に興味を抱いていました。

そんな時に大手化学会社に勤めている友人が塩化ビニールを扱っており、これを製品化する方法を研究してみないかと誘われ、友人の知識をもとに塩化ビニールの性質を分析し研究を始めました。

塩化ビニールの耐酸性、弾性、耐用性から万年筆のインクチューブの製造を思い立ち、図面を描いたり様々な型を作っては壊したりしながら試行錯誤を重ねました。教科書があるわけでもなく、一つひ

とつ自分の経験とカンに頼りながら、徹夜も厭わず試作を繰り返していました。そしてようやく万年筆チューブの製品化にこぎつけました。



万年筆チューブの製造の様子

文具店を開いている中学時代の友人に大手万年筆メーカーの紹介を頼み、従来の天然ゴムよりも弾性・耐酸性がある新素材を使ったチューブという触れ込みで持ち込んだところ、見事に合格し、第1回の製品納入に際して、田中商店と名乗り、製造会社として事業を始めました。

その後、他の万年筆メーカーからも注文が相次ぐようになり、全国に広まり始めたため工場を建設しましたが、注文をこなしていく中で次第に物足りなさを感じるようになりました。

塩化ビニールという優れた素材を、ただ万年筆の部品で終わらせるのはもったいないという思いと満州での過酷な体験から抱き続けていた「手を守りたい」という強い思いが結びつき、手袋に生かすことを見きました。

石油化学製品を扱い化学原料の知識を得るうちに、塩化ビニールと出会ったことは偶然ではなく、そこに運命的な予感を抱いたのです。

Turning Point

世界初、塩化ビニール製手袋の開発

万年筆のチューブも手袋も製造の方法は概ね同じですが、その用途は全く異なります。

チューブは径何ミリかの一本の筒状の袋であって固定された部品ですが、手袋は自在に動く人間の指を覆い、保護するものです。しかも物をつかんだり、操ったり、感覚を確かめたりする、微妙な手の動きを妨げない機能性が要求されるため、何よりも精巧な型が必要でした。

人の手は、家事や野外作業で鍛えた太い指もあれば、冬場はあかぎれで膨らんだ手もある。それらをやわらかく覆い、しかも作業しやすいものでなければなりません。人それぞれ違いのある手のひらと指を最大公約数的に求めなければならず、明雄氏は従業員の手をモデルにして、石膏や粘土でいくつも型を取り、手袋の母型を作るところから始めました。

塩化ビニールペーストの調合も、万年筆チューブの時のように単純ではなく、焼入れのちょっとした温度や時間差によって未完成のものになってしまい原因不明の不良品も次々に出てきました。

しかし、失敗は経験となり何度も繰り返す中で完成品の形が見えてきて、次第に製品化に自信を持つようになりました。

一方、量産化するためには生産設備が必要であったため、チューブの製造設備と並行して、手袋の製造設備を設置することにしました。



創業当時の作業場の様子

設備の目途がたったところで1954年、明雄氏は自らの経営信条、「社内及び社外の皆さまと共に栄え、信用される良き関係をまず一番に考えること、それが『和を 尚ぶ』である」と社名で表現した、尚和化工(株)を発足させました。

社員もそろい設備の構想は着々と進みましたが、肝心の手袋の型づくりには最後まで苦労が付きまといました。何度も試作を繰り返し、仕上がった製品を全数検品する中で、一つでも不良品があれば全品を廃棄処分にし、また一からやり直しです。「一つでも悪い品ができるということは、全部悪い」という明雄氏の頑なさは徹底しており、生涯その姿勢を崩しませんでした。ある時点で妥協するのは、場合によっては致命傷になるということを肌で感じていたのです。この考え方は、以後の同社のものづくりの根幹となり、現在も受け継がれています。

こうして創意工夫を重ねた末、ついに世界で初めての塩化ビニール製の厚手手袋が完成し、ビニールのグローブということから「ビニローブ」と名付けられました。

ビニローブの特徴である耐酸性、耐アルカリ性、耐油性に優れ、臭いがなく使いやすいということが認知されていくと需要はさらに膨れ上り、1960年に兵庫県姫路市に本社工場を建設すると、続いて工業用手袋や、家庭用手袋、滑り止めがついた漁業用手袋を開発し、全国にビニローブが浸透していきました。

以降も高度経済成長やプラスチック製品の普及など、時代の変化・消費者のニーズに合わせて次第に多品種を生産するようになりました。



1972年建設 仁豊野工場(兵庫県姫路市)



工業用手袋

ただし、明雄氏は一度市場で信頼を得た製品はできるだけ長期間販売を継続するという方針を堅持していました。

自信のある優れた製品は、いつまでも、どこででも手に入れることができるよう努力しなければならないとし、そのため新製品が出ればすぐに現行品を廃番にするというようなことはなく、かつ、ニーズに細やかに対応した商品開発を進めるうちに品番は増え続け、製品の数は2000年になると1,000品種を超え、その中から超ロングセラーとなる商品も次々と生み出していました。



ステンレスワイヤー糸を用いた耐切創手袋。ガラスや鉄板などを扱う際に使用する。(2012年特許取得)



家庭用手袋で国内シェア第一位*を獲得した「ナイスハンド®」シリーズ。

*出典：インテージSRI+ 家庭用手袋市場
2024年1月～12月 累計販売金額

Turning Point

マレーシアを皮切りに世界へ進出

1980年代、円高・インフレ・貿易摩擦などから日本企業は活発な海外進出を展開しており、大手企業を中心に海外での工場建設を促進していました。

明雄氏は日本国内の厳しい経済環境と市場規模の限界、そして原料の確保などの観点から、東南アジアへ生産拠点を求める構想を持っており、まずマレーシアに注目しました。

1989年、マレーシアから世界各地に商品を送り出そうと、SHORUBBER(MALAYSIA)SDN.BHD.を設立。これが最初の海外拠点となりました。さらに1997年には、海外戦略をより重視していくために、社名をショーワ株式会社に変更しました。

その後、ベトナム、ミャンマーへと生産拠点を拡大し、生産数を大きく伸ばすとともに安定的な供給網を構築していきました。

そして、製造拠点のみならず初の海外販売拠点として1997年にSHOWA U.S.Aを設立すると、2000年にはSHOWA EUROPEを設立し世界中に販売網を拡大していきました。

日本一の手袋メーカーから世界一を目指して飛躍する新たなステージに立ったのです。



マレーシア工場
SHORUBBER (MALAYSIA) SDN. BHD.

ニトリルゴム製手袋の国内生産を開始

2006年、現在のショーワグローブ株式会社へ社名変更を行いました。

2015年にはグローバルなショーワブランドの確立を目指し、ブランドロゴを刷新。新しいロゴにはライトグリーンとブラックの配色で革新性と力強さを表現し、「SHOWA」の「O」には生産時の手型の精巧な動きをイメージしたデザインを施して、品質と技術力への自信を込めました。

一方で、国内においては2020年のコロナ禍により、感染症対策から使いきり手袋の需要が世界的に逼迫したこともあり、需要増と国内での供給安定化の必要性を受け、ニトリルゴム製使いきり手袋の生産体制を構築しました。

これまでニトリルゴム製使いきり手袋は国内での生産拠点がなく、海外からの輸入に頼っていました。そこで同社は、この社会課題を解決し、安心・安全をお届けしたいという思いから、2023年、香川県坂出市に国内最大のニトリル手袋生産拠点として新工場を設立。

1日当たり360万枚、年間で約11億8800万枚を製造可能。生産から梱包までをほぼ無人で行う自動化システムを構築し、衛生的かつ高い生産効率を実現しました。



瀬戸内海を望む坂出事業所(香川県坂出市)



ニトリルゴム製使いきり手袋



「世界中の手を守る」を合言葉に

創業以来、同社は数々の独創性あふれる製品を生み出し、手袋の新しい価値を提案してきました。

人間の感覚器として重要な器官の一つである「手」を守りたいという創業者の思いを受け継ぎ、手を守る、手で触るものを見守る、という視点で商品開発を続け、家庭用手袋の製造では国内トップシェアを獲得するに至りました。

その歴史の根底には、「人の真似をしない」「手型が完璧でなければ、いい手袋はできない」「品質に納得すれば、また買ってくれる」「先知・先手」といった搖るぎない信念が息づいています。

「世界中の手を守る」を合言葉に、手袋を通して世界中の人たちに安心と安全を届け、社会に貢献する企業として、グローバルに成長されていかれることでしょう。



<会社概要>

本社所在地 兵庫県姫路市砥堀 565

事業内容 家庭用・作業用・産業用各種手袋、
製造・販売、クリーンルーム用各種手袋
の製造・販売、環境調和型手袋の製造・
販売

創業 1954(昭和29)年10月

資本金 4,860万円

従業員数 384名



同社ホームページにリンクします▶